

3. 活動内容

(1) 3年「前芝生き物たんけん隊」・4年「アサリから見える前芝」の実践 (環境)

①実践の目的

本校は三河湾に面した自然豊かな地域であり、昔から自然の恩恵を受けて生活してきた地域である。昭和初期にかけて日本三大海苔生産地といわれ、海苔養殖業は地域の産業として発展してきた。また、六条潟や西浜は古くからハマグリ、アサリの最適な漁場として知られていた。その後、都市整備計画にともない漁業は行われなくなったが、魚貝類の食品加工業は今も発展している。

そこで、総合的な学習の時間において、校区にある六条潟の生き物調査や地域の方々との交流を通して、3、4年生の子ども達が校区の自然の豊かさに気づき、ふるさと前芝への思いと愛着心をもつ子どもに育てたいと考え、本実践に取り組んだ。

②実践について

(ア) たくさんの生き物が生きてるよ！



生き物調査をする3年生

6月29日にアジアの浅瀬と干潟を守る会とみなと塾（校区の加藤正敏さん主催）の方々とともに、干潟での活動を行った。3年生は干潟の生き物調査、4年生はアサリの個数調査から、干潟について調べた。地域ボランティア20名の浜レンジャーの方々に協力をいただき、それぞれ9つのグループに分かれて調査を開始した。普段入ることのない干潟に足を踏み入れ、楽しそうな歓声があがっていた。

3年生は、干潟の砂を掘り起こし、水生生物を採取した。マテガイ、バカガイなどをバケツに入れ、「こんなにたくさん見つけたよ」と互いに見せ合っていた。また、ハマグリも見つけ「ハマグリもいるんだ」と驚いた表情を見せた。

岸にもどると、マハゼ、マテガイ、コブシガニ、ゴカイ、マガキ、オゴノリ、ウミニナ、ホトトギスガイ、バカガイ、シオフキ…と、浜レンジャーの皆さんに教えてもらいながら、嬉しそうに生き物の名前を書き出していた。

(イ) こんなにアサリがいるんだ！

4年生は、干潟に設けた9か所のポイントに分かれて、30cm平方木枠内の砂を掘り起こし、その中のアサリの個数と重さを調べた。木枠の中の砂をふるいにうつし、見つけたアサリを丁寧に洗いトレーに入れたていた。「大きさがいろいろあるね」「こんなに大きいのがいるよ」と、口々に



アサリの個数調査をする4年生

つぶやきながら真剣なまなざしで作業を進めていた。

岸では、グループごとアサリを並べ、数を数えた。ほとんどのグループが100個以上を数え、480個のグループもあった。子ども達は、思った以上にたくさん生息していることに驚いていた。グループごとワークシートに結果をまとめ、全体の集計を出していった。

六条潟にアサリの稚貝をまいて大切に育てている活動が行われているなか、子ども達は多くのアサリが育つ昔の六条潟にもどりつつあることを実感できたようだ。



アサリの個数と重さを調べる4年生

(ウ) 干潟のこと、もっと知りたいな！



山本さんと活動を振り返る3年生

7月3日に、アジアの浅瀬と干潟を守る会の山本さんに来ていただき、干潟の生き物調査の事後学習を行った。写真を見ながら、活動を振り返るなかで、多くの質問が子ども達から出てきた。干潟にすむ貝の生態に関心をもった子ども達は、アサリとシジミ、ハマグリが塩のからさによってすみ分けていることを知ると、「へえ〜」「初めて知ったあ」と口々につぶやいた。また、アラムシロとウミニナが、海のそうじ屋だということも教

えてもらい、子ども達は干潟に対してさらに興味をもったようだった。

振り返りには、「干潟はいろいろな生き物がいっしょに暮らしていてすごいと思いました」「アサリがずっと住める干潟にしたいと思いました」「この干潟を守っていきたいと思いました」「来年も調べたいです」とい記述が見られ、干潟への思いが伝わってきた。

③実践の成果

3年生は初めて、4年生は昨年に引き続き2回目活動であった。3年生も4年生も、それぞれの活動の中で、六条潟にふれ、今まで抱くことのなかった思いをもつことができたようだった。

4年生児童で作成している学級新聞『フレンド』には、「前芝の干潟は、アサリやそれ以外の貝が多く住んでいる豊かな場所だと思いました。」と記されている。子ども達の心にこのような思いがさらに醸成されるように、活動を続けていきたいと思う。

4年生は、前芝で海苔づくりを始めた壺野甚七さんについて学習をした後、海苔すき体験を行った。

これからも、ふるさと前芝への思いと自信をもち、社会で強く生きていく子どもの姿を目指してしていきたいと思う。



(2) 前芝の田んぼ ―おいしいお米をつくろう― (勤労体験)

①実践の目的

前芝校区は川や海岸に囲まれており、その地形を利用して学校の周辺は田んぼが広がっている。昔は専業農家も多くあったが、現在は自給的農家が大半を占めている。また、学校にはたくさんの昔の農具が保存されているため、それを使って体験活動を進めたいと考えた。

そこで、総合的な学習の時間と社会科の学習において、米作りの体験学習を通して、昔の生活を学びながら勤労の大変さや収穫の喜びから感謝の気持ちを感じる活動を行うことにした。また、米作りに携わる地域の方々と交流しながらその苦労や工夫、抱える問題などを考えることで、田んぼが広がる前芝を大切にしていこうとする子どもを育てたいと考え、本実践に取り組んだ。

②実践について

(ア) 田植え

5月に校区の牧平さんのご指導のもと、土入れ、代掻きを終えた学習田「すくすく田んぼ」で田植えを行った。初めて子ども達がほとんどで、一つ一つ苗を丁寧に植えるのも真剣そのものだった。牧平さんにコツを教えてもらいながら、印をてがかりにまっすぐ植えようとするものの、曲った苗の列を見て、「昔の田植えは、難しかったんだ」という声があちらこちらから聞こえた。機械のなかった昔の米作りの工夫と大変さを実感できたようだ。



印に合わせて田植えをする5年生

また、社会科の授業では、米作りに携わる人々が抱える問題に対して、一人調べに取り組んだ。前芝校区にもみられる生産者の減少などに対して、真剣に自分の考えを語る子どもの姿が見られた。そして、自分たちができることを考え、「農家を手伝って…跡継ぎができるようにする」「もっとお米を食べる」など米作りを身近に感じ、前芝の田んぼの将来を考えることができた。

(イ) 稲刈り

水の管理や肥料、雑草とりなど牧平さんの助けをいただき、11月には子ども達の田んぼが黄色の稲穂でいっぱいになった。11月4日には牧平さんと一緒に稲刈りを行った。鎌で刈った稲をひもで束ね、はざかけをしていった。「お米を作るのに昔の人がどれだけ大変だったか分かった」「たくさんお米が取れそうだ」と、収穫を喜びながら、楽しそうにはざかけを進めていた。



稲を束ねて、はざかけする様子

